

歴博国際シンポジウム「東アジアをむすぶ漢籍文化」2012. 11. 2～3 開催 Q&A集

*このページには、歴博国際シンポジウムの開催期間中、ご来場の皆様からいただいた質問にお答えするものです。24名のパネラーの先生方からそれぞれ回答をいただき、シンポジウム準備局で取りまとめてお答えします。

Q1. 敦煌から出土した『論語義疏』に、日本の古写本と同じように「声点(しょうてん)」があることを初めて知りました。でも、なぜ中国の人が漢字の発音を記録する必要があったのでしょうか？

A: 漢字の高低アクセントをあらわす「四声(しせい)」は、ただ単に発音が難しい漢字にだけ付けられたものではありません。実は中国の漢字の幾つかには一つの文字に複数の発音があり、その読み方やアクセントの違いで意味を区別するものがあります。例えば、日本にも伝わっているものでは、「楽」という漢字を、〈たのしい〉という意味では「ラク」と発音し、〈メロディー〉という意味の時は「ガク」と発音するのがそれです。ほかにも「好」の字の場合、〈よろしい〉という意味のときは音のまん中が緩やかに低くなる「上声(現代の中国語では第3声)」で、〈すき〉という意味のときは高音から一気に下がる「去声(現代の中国語では第4声)」になります。発音の区別は意味の違いを表しているのです。

Q2. 「声点(しょうてん)」は音読みと訓読みの違いを表すことがあったのでしょうか？

A: 日本の古い写本には「声点」のほかに、もうひとつ「訓点」という記号がついているものがあります。後者は「訓読」を示す記号です。その訓点にはさまざまな記号がありますが、その中に漢字を音読みするのか訓読みするのかを識別する記号があり、一般的な方式では、漢字の中央かあるいは右側に縦線が引かれているのが「音読み」、左側に縦線が引かれている文字や熟語が「訓読み」です。ちなみに、平安時代から江戸明治に至る漢文訓読の歴史をおおまかに辿ると、「訓読み(和訓)」が多く使われる傾向にあるのが平安時代以前の読み方で、その後中世、そして近世へと時代が下るにつれて、漢字を中国の発音そのままで読む「音読み」が増える傾向にあります。

Q3. 朝鮮半島の人々は古来どのようにして中国の古典を読んでいたのですか？

A: 古代朝鮮にも日本の「訓読」によく似たシステムがありました。「口訣(クギョル)」というもので、中国古典の語順を朝鮮語の語順にあわせて返り読みしたり、語順は中国語のまま、文の切れ目に朝鮮語の助詞(日本語のテニヲハに相当する)をはさんで行くなど、日本の漢文訓読によく似ています。また古代日本の「候文(そうろうぶん)」のように漢語を交えて文書を書き記す「吏読(イドウ)」、万葉仮名のように漢字の発音を借りて古代朝鮮語を記す「郷札(ヒヤンチャル)」という表記法も伝わっていました。これら古代朝鮮の漢文訓読法と日本の漢文訓読との関係については、これから解明してゆかねば

ならない多くの問題があります。

Q 4. 朝鮮半島の人々はハングルで詩を書くことはあったのでしょうか。また、それらは漢詩とどのように違いがあったのでしょうか？

A：古代朝鮮にも自国語で歌った「郷歌（ヒヤンガ）」あるいは「時調（シジョ）」といった歌謡が伝わっています。これらの歴史は「ハングル（訓民正音）」が作られた十五世紀よりも更に古くから発生し、漢字の発音を借りて（上のQ 3を参照）記録されました。なお、このような母国語による歌の多くは、短いフレーズで庶民的な感覚をストレートに表現したり、季節の変化に敏感に反応したりする点で、日本の俳句にも感覚的に共通する部分があり、また中国でも、十世紀頃より、漢詩とは異なり、楽曲のメロディーに合わせて言葉を綴って行く「曲子詞（きょくしし）」「宋詞（そうし）」もしくは「填詞（てんし）」と呼ばれる新しい文学が、これらによく似ています。

Q 5. 『白氏文集』については日本に残る金沢文庫本などが白楽天のオリジナルの本文を残っていて貴重だということが今回のシンポジウムでよくわかりました。しかし現在の中国で出版されている『白居易詩集校注』（中華書局）などでは、中国の版本と日本の金沢文庫本とに文字の異同があった場合、必ずしも金沢文庫本を採用していないのは何故でしょうか？

A：確かに原作者に古いテキストが最も貴重で、時代が下がるにつれて本文に誤りが生じてくるのが自然の原理なのですが、中国古典の本文の校訂は一筋縄では行かない複雑な問題があります。例えば古い写本だからと言っても写本特有の書き誤りがあり、また後世の印刷本であっても、その出版に当たって由緒ある善本を参照して校訂されているものがあります。必ずしも時代が古いものが正しいとは限らないのです。金沢文庫本の本文についても、慎重にその是非を吟味し、さまざまな傍証を重ねた上で正しい本文とすべきなのがあります。

Q 6. 荻生徂徠が柳沢吉保と面識があったとの指摘がありましたが、徂徠は吉宗の時代に登用された人物なので、二人は対面していないと思います。

A：ご意見有り難うございました。一般的な定説では荻生徂徠は吉宗時代に活躍したことになっていますが、近年の研究では、それ以前にも綱吉の側近である柳沢吉保の庇護を受けていたことがわかってきています。

Q 7. ディスカッション第五部のタイトル「聖教と漢籍」についてお尋ねします。「聖教」と聞くと、仏教だけでなく、儒教やキリスト教、そしてイスラム教なども含む全ての宗教を指すように思いますが、本当はどのような意味があるのですか？

A：学術用語の「聖教」には幾つかの特別な意味があります。また、日本では読み方も異

なります。

(a) 「聖教(しょうぎょう)」＝中国南方の古い漢字音である呉音(ごおん)で読む場合は、仏教の経典類に限定して用いられます。またこの場合、いわゆる「お経」である仏典だけでなく、歴代の高僧たちが書き残した儀式の際のメモ類や書簡など、その寺院に永年保管されてきたさまざまな文書も含むため、特に「聖教類(しょうぎょうるい)」という言い方も行われています。神奈川県金沢文庫に隣接する称名寺(しょうみょうじ)など日本の中世以前から伝わっている由緒ある寺院には、膨大な「聖教類」が保存されています。

(b) 「聖教(せいきょう)」＝七世紀以降の中国北方(特に長安や洛陽)で話されていた最もノーマルな漢字音を漢音(かんおん)と言います。この発音で読む場合は、特定の宗教を指すことなく「すばらしい教え」という意味で使われます。古くは孔子や孟子の儒教の教えを指していましたが、仏教やイスラム教など、世界のあらゆる宗教において使われるようになりました。ちなみに、書道の楷書の名品として有名な唐の褚遂良の「雁塔聖教序(大唐三蔵聖教序)」は、西暦653年にあの玄奘三蔵がインドから持ち帰った仏教の経典を称える文章ですが、ここでは「中国古来の儒教に匹敵するすばらしい教え」という意味で使われており、本来この言葉が仏教に限定するものではないことがわかります。

*以上、さまざまなご質問有り難うございました。

当シンポジウム開催代表 静永 健(文責)